

行事のご案内

○金目川水系流域ネットワーク 流域フォーラム2007のご案内

— 水源部の山林はどうなっているか。それは私たちの生活にどう関わっているか —
2007年2月4日(日) 午後1時～4時30分、東海大学13号館(201教室)、で話し合
いましょう！(お誘い合わせの上、ぜひご参加下さい。)

この秋は神奈川でも、シカやイノシシなど野生の獣の被害が、以前にも増して多いようです。山地が一層住みにくくなっているのではないのでしょうか。来年から水源部を保全するための県税が課税されることになりましたが、どのように使えば効果があるのでしょうか。

流域の産業や生活に関わりの深い上記の問題は、山から海までの循環型社会を考える金目川水系流域ネットワークにとっても、これからの大きな課題です。

そこで、「流域フォーラム2007」では、まず次の3分科会に別れて話し合い、次に全体会に合流して、「金目川流域で協力して出来ること」を、みんなで話し合いたいと思います。

- 分科会1: 神奈川の山はどうなっているか、それは川や海にどう影響しているか
- 分科会2: 流域における地産地消の農業の意味と問題
- 分科会3: 流域における環境教育

流域の昔を知ろう…… 秦野の暮らし今昔

宅見孝子

環境庁に認定された秦野の里山 1987年に葛葉峡谷が「神奈川ナショナルトラスト」第1号に指定されました。続いて89年に環境庁から、これまでホテルをはじめとした緑地保全活動が認められて「生きもののふるさと」119選になり、2006年には名古屋の里山が「日本の里地里山」に選定されて、現在、県保全協議会と自治会が一緒になって、地域の歴史・文化・暮らしなどについて調査が進められています。

葉たばこ生産さかんな頃の里山と暮らし かつて、タバコの町と云われただけに、日本三大名葉「秦野達磨」と称され、農家は葉たばこの生産によって一年を暮らすようなものでしたから、出来栄への「等級」の向上に大変熱心でした。農家では、お正月が過ぎると「山仕事」があります。まずソダ切りをして、一年じゅうの燃料を貯えるために薪を作り、タバコ苗などの苗床を作るために「くずかき」(木の葉掻き)がされ「山と人の暮らし」は一体のものでした。苗床が出来上がってほっとする4月3～4日に恒例のお花見がやってきました。

母親は3日にはお赤飯を炊いておにぎりを作り、4日には太巻きのお寿司と、田舎料理とはいえ、心を込めたご馳走を重箱いっぱい詰めたお弁当を作ってくれました。

里山での子ども達の遊び 男の子はお弁当と自慢の手作りの木刀を手にして、障子紙に軍艦旗を描いた紙を取り付けた竿を担いで小高い山の上に掲げ、陣地を作ります。頃合いを見て相手の陣に向かい、旗の奪い合いが始まります。同じ村落同士の遊びであっても、戦ううちに真剣勝負となり、怪我などお構いなくがむしゃらに走り回る男の姿は、軍国時代の兵隊さんを彷彿させるものでした。太平洋戦争のさなかで、父親が出征している子もいました。この日を「男の節句」とも言われた由縁ではないかと思えます。

女の子は、遠く離れた雑木林の中で男の子の威勢の良い声を聞きながら摘み草をしたり、薪を集めて帰り、母親を喜ばせた記憶があります。

暮らしから切り離されて荒れた里山 あれから60余年が経ちましたが、あの頃は暮らしの中であって心身を育んでくれた林が、今では放置され、踏み入る道もふさがれて、シカやイノシシなどの隠れ処のようです。近年ではヤマビルが大発生したこともあって、持ち山主も厄介物にして顧みない様子で、とても残念です。

丹沢山塊について総合調査が進められ、最大の問題は現在の生活に起因しているといわれますが、60年前の生活が、それを裏付けているように思えます。しかし、もう戻れない現実の中に私も暮らしています。自然保護活動をしながら、もどかしさを覚える毎日です。

「秋の金目川見て歩き」（水系一斉調査）のご報告

○ 葛葉緑地から秦野駅までの 8 キロを歩いて

三嶽 良子

11月12日(日)、好天にめぐまれて「金目川見て歩き調査」のイベントが行われた。秦野市の「くずはの家」に集合し、東海大の学生さん 30 名ほどを交えて総勢 45 名。野間氏の説明の後、葛葉川を渡り、蛍の発祥地の湧水から見学。湧水の流れる所には、セリが茂っていた。

(葛葉湧水を囲んでの見学)



トラスト第 1 号に指定された葛葉緑地は、深い谷と蛇行した川であったから、手付かずの自然が現在まで残ったのだと思う。川の流れて歩いてみると湧水が数多くあり、サワガニや、ウグイが列になって泳いでいるのを見ることが出来る。

葛葉緑地から葛葉川に沿っている道路からは、下を流れる川の姿を見ることは難しいが、246号線を横切り九沢橋を渡ると、蛇行した流れが穏やかになった葛葉川になる。その辺りは今、住宅がぎっしり建てられているが、以前は田んぼで川沿いに水車が回っていた。川に添って十代橋へ歩くと、左岸にケヤキの茂みや竹やぶがあり、やや自然の川らしい景色になる。ここで川を見ながら昼食。かつ

てはこの辺りでよくカワセミを観察した。

午後、川原町団地を抜け、住宅と住宅の間の道路から流れる川原町湧水を見る。澄んだ水はゆっくりと流れ、ホテイアオイが生き生きとしていた。その水は金目川に注いでいた。

そこから大安橋を歩いて金目川の流れを観察。コイが 2 匹泳いでいて、ところどころにツルヨシが茂り、上方には弘法山がそびえていた。しばらく水無川の合流した室川に沿って歩き、すっかり整備された水無川に出て弘法の清水に到着。冷たい水で喉を潤し、近くの「寿徳寺」の湧水を見る。湧水は建物の中に入り、しっかり管理されていてかなりの水量があるようだ。

この後、秦野の駅で解散になったが、駅周辺にもかなりの湧水があるとの野間氏のお話で、見に行つて側溝になって流れている湧水を見た。

○ 葛葉川と金目川の合流の観察

柳川 三郎

春嶽山を水源とする金目川は途中にて秦野市民の水がめとして市民の生活水になっており、方や、葛葉川は三ノ塔下の葛葉の泉を水源として菩提、羽根を流れ、金目川と合流する直前は何ども急激なS字カーブをたどり、川辺は自然の断崖と落葉樹の河畔に恵まれて、現在も昔のままです。その自然の恵みは多くの生物の循環に役立ち、生物の多様性に生きています、その葛葉川と金目川の合流には、
(金目川と葛葉川の合流点付近、手前が葛葉川)

大変に興味を持って楽しみの時でありました。合流点は、中洲がなくてえのきの灌木が茂る傾斜地となっています。その位置は高低差があり、川の流れは穏やかさを想像していた私には想定外でした。自然は教えてくれます。人知を超えた姿を見せること、金目川より葛葉川のほうが強い水流と水量であること、金目川は細く深い流れであること等です。そのことは、私たちの社会でも時には穏やかに、時にはすさまじい難局を与えることと同じように思えてなりません。又、毎日、私は金目川の中流を歩きノスリ、ハクセキレイ、キセキレイ、セグロセキレイ、コサギ、アオサギ、ホオジロ、ヒヨドリ、カワセミ、カワラヒワ、ジョウビタキ、イソシギ等の出会



いは活力を与えてくれて自然のありがたさに感激しております。同時にこの自然を次世代へもつなげなくてはとの思いを強くしている次第です。

(2006年11月12日)

○金目川水系流域ネットワーク「見て歩き調査」イベントに参加して

佐藤 壮((株)地圏環境テクノロジー)

金目川支流の葛葉川の葛葉湧水を出発地点として、寿徳寺湧水まで約 8kmの見て歩き調査に参加した。河川に沿って山を下る調査ルートであったが、比較的ルート上流側でも河川水は豊富で、湧水点も多く、丹沢山系に支えられた豊富な水の存在が伺えた。

調査ルートにおける上流側では、蛇行河川やそれによって強く浸食された谷、河岸段丘などがみられた。湧水地点は、河岸段丘の傾斜変換点での湧出であることが見てとれた。下流側では、地形的な勾配が緩やかになり、支流との合流に伴い河川水の流量の増加が見てとれた。また、湧水地点は見た目では比較的平坦な場所であり、河川水を支える地下水面が比較的地表に近いところにあるのではないかと考えられた。

金目川水系ネットワークの目的である流域環境保全に取り組む上で、水質やその流れをモニタリングすることは非常に重要なことである。昨今、水への関心は強くなっているところであるが、少なからず生じているであろう身近な河川環境問題への注目にはまだまだ距離があると思われる。たとえば河川水は常に流れているために、その場で汚れてしまっても水の流れとともに消えてなくなりそうな感覚になってしまうからである。しかしながら、その場では無くなっても、その流れの先は汚れてしまい、そこに人がいないという保障もない。そういった点では、流域全体を通して地下水も含めた水質管理、流動把握は非常に重要であるといえる。



まずは、水の流れがその場所だけではなく、もっと大規模なものであるという意識を持つことが必要であると思われる。

そのような中で、金目川水系ネットワークは専門家や地域住民が参加して流域環境を守ろうとする活動は非常に素晴らしいことであると思われる。また、参加者の環境保全の意識の強さが感じられる。今後、さらに発展し、流域住民の意識向上と流域環境保全に繋がっていくことが期待される。

たとえば河川水は常に流れているために、その場で汚れてしまっても水の流れとともに消えてなくなりそうな感覚になってしまうからである。しかしながら、その場では無くなっても、その流れの先は汚れてしまい、そこに人がいないという保障もない。そういった点では、流域全体を通して地下水も含めた水質管理、流動把握は非常に重要であるといえる。

そのような中で、金目川水系ネットワークは専門家や地域住民が参加して流域環境を守ろうとする活動は非常に

○金目川上流域見て歩き調査

西岡 哲

これまで金目側水系流域ネットワークでは、毎年 11 月の中旬ごろ上流域、中流域、下流域において、水量、水質、水温、周辺環境等について一斉調査を実施してきた。私は毎年平塚大橋から立堀親水公園までの下流域の調査に参加してきた。私の住まいが黒部丘(平塚市内)なので、下流域については普段から比較の見慣れているエリアである。

調査エリアを上流域、中流域、下流域に分けてしまうと、参加するエリアがどうしても限定され、調査ポイントの毎年の変化を体感するにはよいが、金目川全体のことを知る機会がそがれてしまう。

今回は、みんなで上流域を見て歩くという調査方法に変更した。葛葉湧水から寿徳寺湧水まで葛葉川、金目川を見て回った。上流域の金目川は下流域に比べればまだ自然が残っているようである。ネットワークにかかわっていても 8Kmも金目川を歩くという機会はめったになく、今回の調査で上流域の金目川の自然を体感し、人と川がもっと近くなるような河川環境を創出していくことの大事さを思った次第である。

「見て歩き調査イベント」に参加した感想

○その1

安部 鴻

今回初めて参加させていただきました。秦野市内の豊かな水が地下水であると聞いていましたが、今回、回って見て思わぬところにあり、びっくりしております。空気と水は命に直接かわる大切なものであると、普段から関心を持っております。月き1回、里山整備のボランティアを始め、その中でも水の大切さを実感しております。

○その2

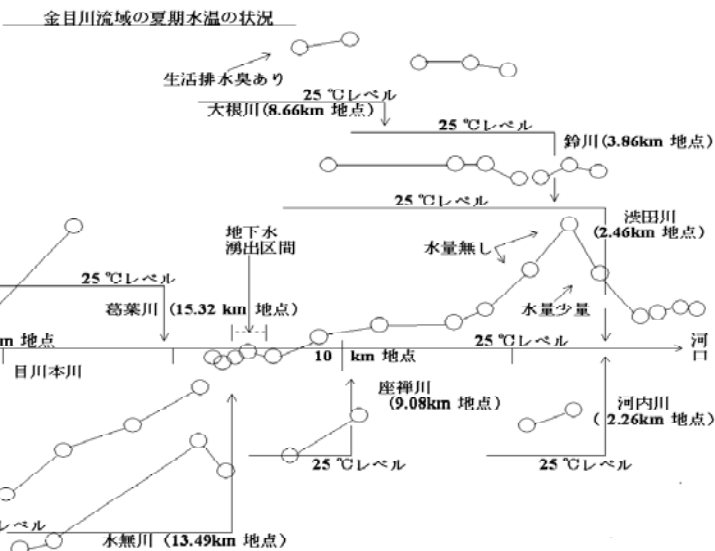
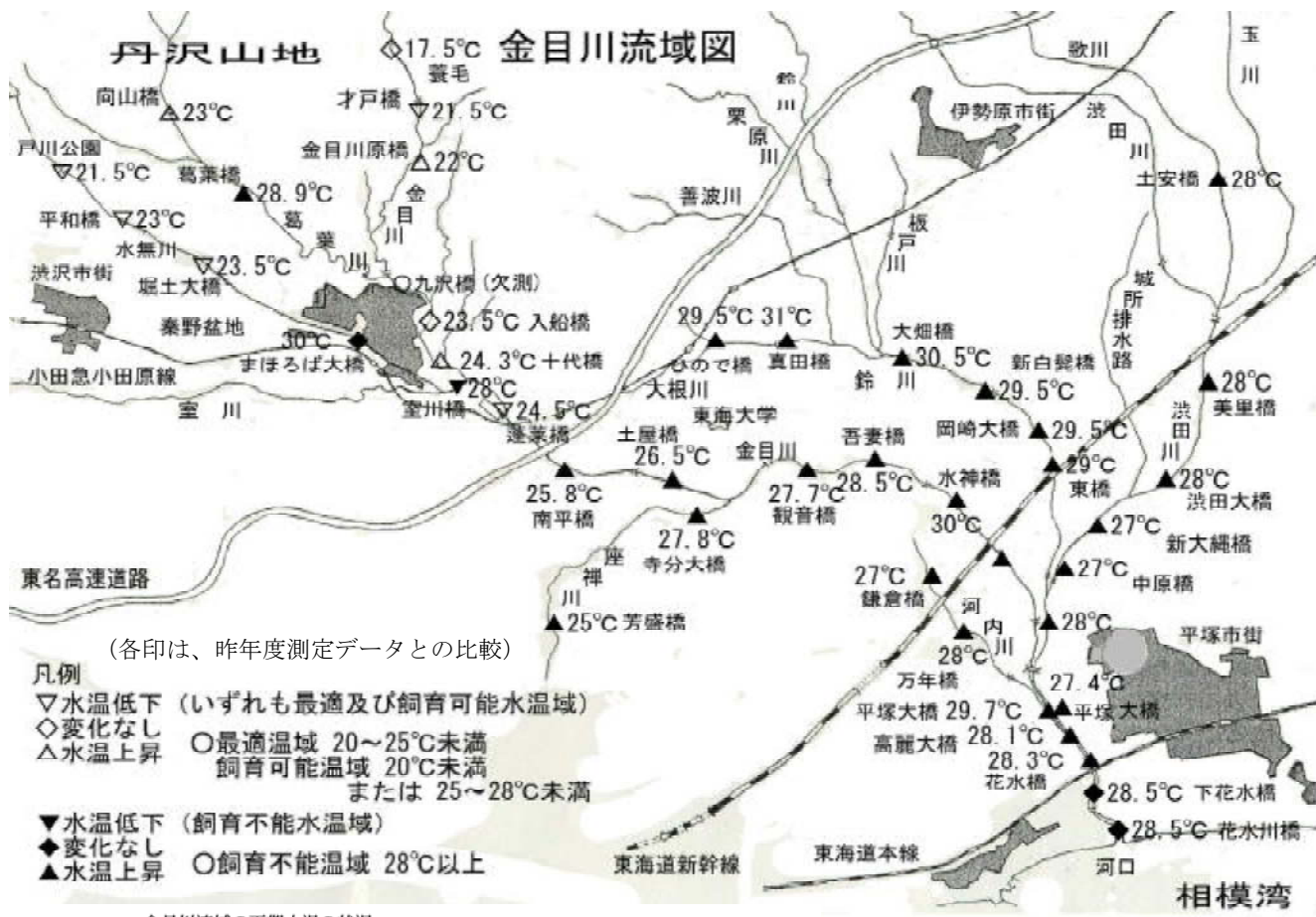
種市 紀恵子

小田急秦野駅から、こんな近くに湧水群やホテルの里がある。そして、くずはの家から吊橋をわたると団地があるのも不思議な感じです。子どもの頃にタイムスリップした様に……。誘った友人がちょうど足を痛めて歩けなかったのが残念です。治ったら案内したいと思います。

金目川流域の夏期水温の調査の結果報告(2006(平成18)年8月16日実施) (文責 野間紀之)

金目川流域の河川水温の上昇傾向がみえ、「鮎の棲息可能性」の視点から憂慮されることから、昨年8月16日に引き続き、本年も実態把握のため同日に水温測定を行った。

その結果は、下の両図にみるとおりであり、鮎の棲息適温とされる水温 25℃を下回る地点は、金目川河口からおよそ12km上流の地域より上流側となっていることが明らかとなった。(下図参照)



(上図は、測定データ図、また左図は、本・支川ごとの昨年度水温データ変化図)

なお、当該12km地点より上流の葛葉川、水無川などの各支川では、本川流入地点ですでに25℃を上回っているものの、合流点下流の本川と東名高速道路及び小田急小田原線との交差点の河川床(同13~15km地点)で本川内に大量の湧水がみられ、この影響による河川水温の低下や安定化が認められている。(上・右図参照)

〇ご意見、ご感想、地域情報、入会希望などがございましたら下記までお寄せ下さい。

事務局 〒259-1292 平塚市北金目1117
 東海大学教養学部人間環境学科自然環境課程 佐々木園子
 事務局あてのご連絡は Fax 0463(50)2208 (自然環境課程) あてにお願いします。